



ミンナデスレバ コワクナイ?!

かつての特派員時代の話なので、現在は状況が変わっているかもしれませんが・・・。
——夕方メキシコ・シティのレストランでのことでした。50席以上を収容の広い部屋の一角では、テーブルをつなぎ合わせ15人ほどの日本人観光客が座っていました。すべて男性。どうも日中はティオティオワカンのピラミッドを見学、ソチミルコで舟遊びを楽しんできた模様です。やや興奮気味で印象を語り合っていました。お土産用のソンプレロがテーブルの片隅に山と積まれています。

と、一人が手を上げ、大声でウェイトレスを呼びました。「ネーチャン!」。はっきりとした、しかもやや卑俗な印象を与える日本語です。近づいてきたウェイトレスに、今度はグループの通訳らしい別の男性がスペイン語で勢いよくまくしたてました。「いったい、どのくらい待たせるんかね!注文してからもう30分も経つんだぞサ!」

周囲が再びこれに雷同して日本語でガヤガヤ騒ぎ始めました。ウェイトレスはその日本語が感覚的にわかったかどうか、スペイン語で先の男性に何かを説明すると奥に消えていったのです。

ようやく料理も出てきました。テキーラも十分にまわったらしく、興に乗ったそのグループは今度は大声で日本の歌を歌い始めたのです。レストラン内には家族連れのメキシコ人、またアメリカやヨーロッパから訪れた夫婦連れの観光客が静かに歓談しながら食事をしています。なかには明らかにイライラを抑えている感じの客もいました。

たぶん、テキーラの程よいまわりが旅の開放感に拍車をかけているのでしょう。あるいは異国での新体験の連続に感激し、その一方でホームシック的な心情が、日本の歌を高吟させたのかもしれませんが。

でもこれが仮に一人だったらこうした光景は決して起こり得なかったでしょう。元来が外では引っ込み思案の傾向が強い日本人のことです。ただそれが、団体となったとき「ミンナデスレバ コワクナイ」心理が働いてくるのでしょう。そこには日本人特有の群れ歩きや、自主性のなさが反映しているともいえます。まして男性のみという欧米の感覚からすればやや異常な旅行団の性格も副因になっていたのでしょう。

そもそもラテン・アメリカに来たらラテン・アメリカの風習を尊重するのが自然の姿です。「郷に入ったら郷に従え」。アスタ・マニャーナのリズムの国で、注文の品がまだ来ないと、セカセカする方のギアの回転を調整しなくてはいけない。ここでは、時間をかけてゆっくりと食事時の懇談を楽しむのが本来の姿なのですから。

ところが、大型ジェット機の轟音と共にやってきた日本人は、寸暇を惜しんで疾風のごとく観光地を駆け抜け、カメラのシャッターを押しまくっていく。そして札びらを切って観光地の土産品を買い占めていくのです。しかも経済的な優越感が、ときに現地の人々の眉をしかめさせる言動へつながったりしています。

元来が親日的なメキシコのこと。ひょっとしたらあのレストランの中には日本語を理解するメキシコ人もいたかもしれませんが。となればウェイトレスの心の奥まで思いやれる人間性が欲しかったと思うのです。

もう20年以上も前のことでした。たまたま特殊の事例だったのかもしれませんが。今は日本人観光客のマナーも良くなっていると思うのですが、読者の皆様、いかがお感じでしょうか。いつか貴国を再訪問したいと願っている、メキシコファン過去の記憶と視点とらえていただければありがたいのですが・・・。

